

「内務省委託本」調査レポート

第12号：ひとりの検閲官の素顔

—安田新井の日記から—

2016年3月(報告/牧義之)

発行:千代田区立千代田図書館

戦前期の日本では、中央官庁の一つであった内務省が出版物の検閲を行っており、全国で出版されたさまざまな本が内務省に納本されていました。昭和12(1937)年頃以降、内務省で検閲業務に用いられた原本の一部が、千代田図書館の前身である駿河台図書館をはじめとする市立図書館4館に委託されることになりました。当館では、これらの資料を「内務省委託本」と呼び、現在約2,300冊が確認されています。

当館の所蔵する「内務省委託本」は、実際に検閲に使用されたもので、内務省の係官が内容をチェックするために引いた赤線・青線、出版の可否についてのコメントなどが残されています。発禁本は含まれていませんが、当時どのように検閲が行われていたのかを知ることができるという点で、出版史上貴重な資料です。当レポートでは、「内務省委託本」の調査研究により明らかとなった新事実について、様々な切り口からご報告いたします。

1. 検閲官の日記

近年、戦前・戦中期の検閲制度に関する研究が進展し、さまざまな資料の発掘とともに、検閲の実態が明らかになりつつある。制度としての側面が徐々に分かってきた一方で、個々の検閲官に関する調査や報告は、これまでのところほとんど見られない。それは、個々人に関する資料がそもそも少なく、役人がどのような生活を送っていたのかは、『出版警察報』や『出版警察資料』といった官憲資料からでは、分かりえないためである。

そのような中、内務省警保局図書課で検閲事務に携わっていた安田新井(名前の読みは「にい」か?)という人物の日記が発見された。日記は筆者が架蔵するもので、昭和6年、10年、11年の3年分である。3年ほど前に古物商から購入した。安田は博文館の「スタンダードダイアリー」を用いていたが、昭和10年と11年のものには標題紙に「納本」のスタンプが捺されている。市販の日記帳も出版物であるため、検閲の対象であり、内務省へ納本された。それを安田は私物化したのだろう。



安田新井の日記

【左(左から順に)】 昭和6(1931)年、昭和10(1935)年、昭和11(1936)年

【右】 昭和10(1935)年の標題紙には、右上に「納本」スタンプが捺されている 個人蔵

前述の通り、検閲官個人に関する資料はごく限られており、図書課における日々の仕事の内容や人間関係などを浮かび上がらせることは、相当に困難である。本レポートでは、これまでのように「委託本」の書き込みなどからトピックを拾い上げ、当時の社会的背景を追う調査とは異なり、検閲官・安田新井に焦点を当てて、彼が内務省でどのような働きをしていたのかを、残された日記から拾い出してみよう。

2. 安田について

「雇員調」という昭和 10 年頃に作成されたと思しきガリ版刷りの名簿には、安田は「日大専門部法律科」を卒業し、前勤務先は「白木屋呉服店」、図書課へは昭和 3 年 8 月に入課、名簿作成時の年齢は 32 歳と記されている。警察や県の職員を前職とする人間が大多数の中で、安田の職歴は特異である。デパートの職員から出版物を取り締まる公務員への転職であった。また、「出版警察報」第 89 号(昭和 11 年 2 月)の「雑報」に含まれる「検閲掛事務分担表」を見ると、安田は「新聞検閲係」の中で「風俗係」を担当し、「主要婦人、娯楽、大衆性関係雑誌、文芸通信及地方(除東京府)千葉、発行ノ出版雑誌、福井、石川、富山各県下発行ノ新聞紙及東京府下発行ノ小新聞」の検閲を割り当てられている。「千葉」が含まれているのは、彼の本籍が千葉県であることに関係があるのかも知れない。

入課時に安田は「雇」員で、昭和 10 年 8 月 12 日に「属」官へ昇進した。その日の日記に彼は「七年間の功はその実を結んで、国家官吏としてその第一歩を踏み出すことになった」と記している。つまり、昭和 3 年、25 歳の時に臨時雇用として図書課へ入り、7 年間の下積み生活を経て、32 歳で正規の職員(判任官)となった、ということになる。

日	姓	名	職	係	備考
四月八日	安田	新井	検閲	風俗	
四月七日	坂井	時	検閲	風俗	
四月六日	山本	三郎	検閲	風俗	
四月五日	高陽	蔵	検閲	風俗	
四月四日	伊東	貞良	検閲	風俗	
四月三日	杉原	致	検閲	風俗	
四月二日	萩	止	検閲	風俗	
四月一日	長	八	検閲	風俗	
三月三十一日	無		検閲	風俗	
三月三十日	無		検閲	風俗	
三月二十九日	無		検閲	風俗	
三月二十八日	無		検閲	風俗	
三月二十七日	無		検閲	風俗	
三月二十六日	無		検閲	風俗	
三月二十五日	無		検閲	風俗	
三月二十四日	無		検閲	風俗	
三月二十三日	無		検閲	風俗	
三月二十二日	無		検閲	風俗	
三月二十一日	無		検閲	風俗	
三月二十日	無		検閲	風俗	
三月十九日	無		検閲	風俗	
三月十八日	無		検閲	風俗	
三月十七日	無		検閲	風俗	
三月十六日	無		検閲	風俗	
三月十五日	無		検閲	風俗	
三月十四日	無		検閲	風俗	
三月十三日	無		検閲	風俗	
三月十二日	無		検閲	風俗	
三月十一日	無		検閲	風俗	
三月十日	無		検閲	風俗	
三月九日	無		検閲	風俗	
三月八日	無		検閲	風俗	
三月七日	無		検閲	風俗	
三月六日	無		検閲	風俗	
三月五日	無		検閲	風俗	
三月四日	無		検閲	風俗	
三月三日	無		検閲	風俗	
三月二日	無		検閲	風俗	
三月一日	無		検閲	風俗	
二月三十日	無		検閲	風俗	
二月二十九日	無		検閲	風俗	
二月二十八日	無		検閲	風俗	
二月二十七日	無		検閲	風俗	
二月二十六日	無		検閲	風俗	
二月二十五日	無		検閲	風俗	
二月二十四日	無		検閲	風俗	
二月二十三日	無		検閲	風俗	
二月二十二日	無		検閲	風俗	
二月二十一日	無		検閲	風俗	
二月二十日	無		検閲	風俗	
二月十九日	無		検閲	風俗	
二月十八日	無		検閲	風俗	
二月十七日	無		検閲	風俗	
二月十六日	無		検閲	風俗	
二月十五日	無		検閲	風俗	
二月十四日	無		検閲	風俗	
二月十三日	無		検閲	風俗	
二月十二日	無		検閲	風俗	
二月十一日	無		検閲	風俗	
二月十日	無		検閲	風俗	
二月九日	無		検閲	風俗	
二月八日	無		検閲	風俗	
二月七日	無		検閲	風俗	
二月六日	無		検閲	風俗	
二月五日	無		検閲	風俗	
二月四日	無		検閲	風俗	
二月三日	無		検閲	風俗	
二月二日	無		検閲	風俗	
二月一日	無		検閲	風俗	
一月三十一日	無		検閲	風俗	
一月三十日	無		検閲	風俗	
一月二十九日	無		検閲	風俗	
一月二十八日	無		検閲	風俗	
一月二十七日	無		検閲	風俗	
一月二十六日	無		検閲	風俗	
一月二十五日	無		検閲	風俗	
一月二十四日	無		検閲	風俗	
一月二十三日	無		検閲	風俗	
一月二十二日	無		検閲	風俗	
一月二十一日	無		検閲	風俗	
一月二十日	無		検閲	風俗	
一月十九日	無		検閲	風俗	
一月十八日	無		検閲	風俗	
一月十七日	無		検閲	風俗	
一月十六日	無		検閲	風俗	
一月十五日	無		検閲	風俗	
一月十四日	無		検閲	風俗	
一月十三日	無		検閲	風俗	
一月十二日	無		検閲	風俗	
一月十一日	無		検閲	風俗	
一月十日	無		検閲	風俗	
一月九日	無		検閲	風俗	
一月八日	無		検閲	風俗	
一月七日	無		検閲	風俗	
一月六日	無		検閲	風俗	
一月五日	無		検閲	風俗	
一月四日	無		検閲	風俗	
一月三日	無		検閲	風俗	
一月二日	無		検閲	風俗	
一月一日	無		検閲	風俗	

「雇員調」
昭和 10(1935)年
個人蔵

3. 日記からみえる安田の人物像

日記の内容は、当然ながら彼の家族や親族、友人に関する記述が多い。日記を通読して、彼の性格を一言で言い表すとすれば「世話好き」である。親族間の問題解決に奔走するほか、課内の忘年会幹事や野球団の応援団といった、人のための役割を積極的に引き受けている。また、病気になった同僚の許へ給料を毎月届ける役目も負っていた。天気によってその日一日の気分が左右されるという繊細な一面も持ち合わせるが、普段の仕事の中では遠慮のない人物評を行なっていたため、同僚と衝突する場面も時折見られる。

安田の日記には、図書課での具体的な仕事ぶりが窺える部分がある。引用しながら、戦前の一検閲官の業務実態を見てみよう。

<内務省の書庫での作業>

この年には、しばしば内務省の倉庫での作業が記されている。納本された出版物を移して整理する、という仕事だと思われる。

昭和6年1月30日(金)

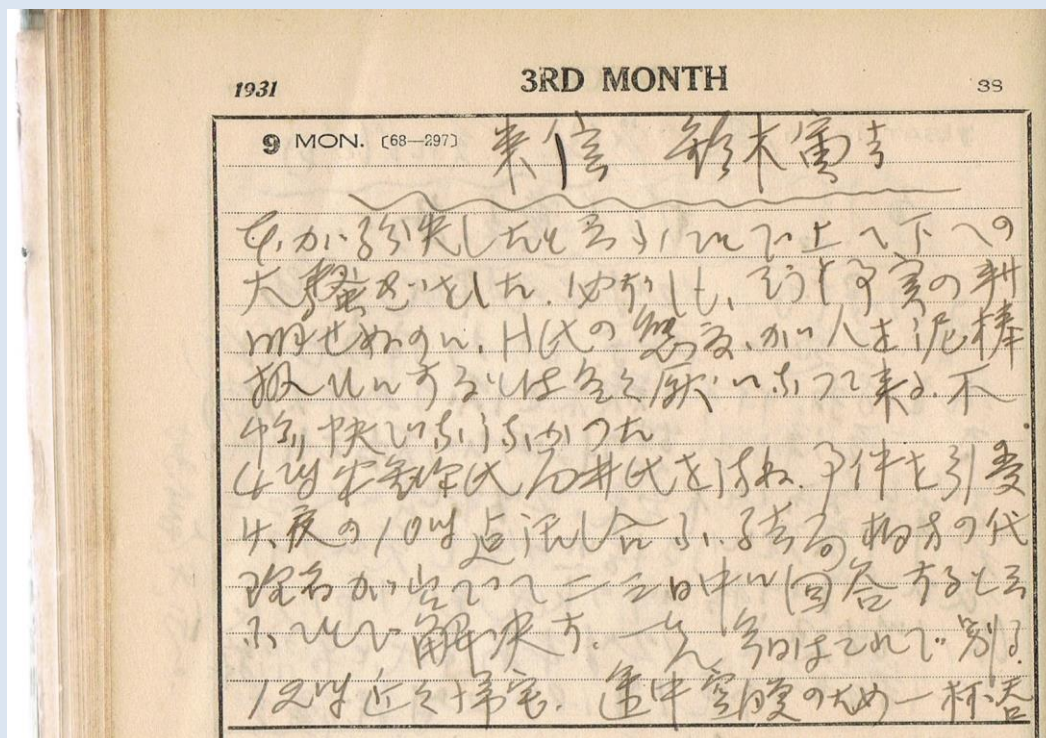
9時四十分登庁、早速仕事に取掛り一日中倉庫の配本をなしてす。

3月6日(金)

午後は倉庫の整理を全部すましておいた

3月9日(月)

本が紛失したと云ふことで上へ下への大騒ぎをした。必ずしも、そうと事実の判明せぬのに、H氏の態度が人を泥棒扱いにするとはいふに厭になつて来る。不愉快でならなかつた。



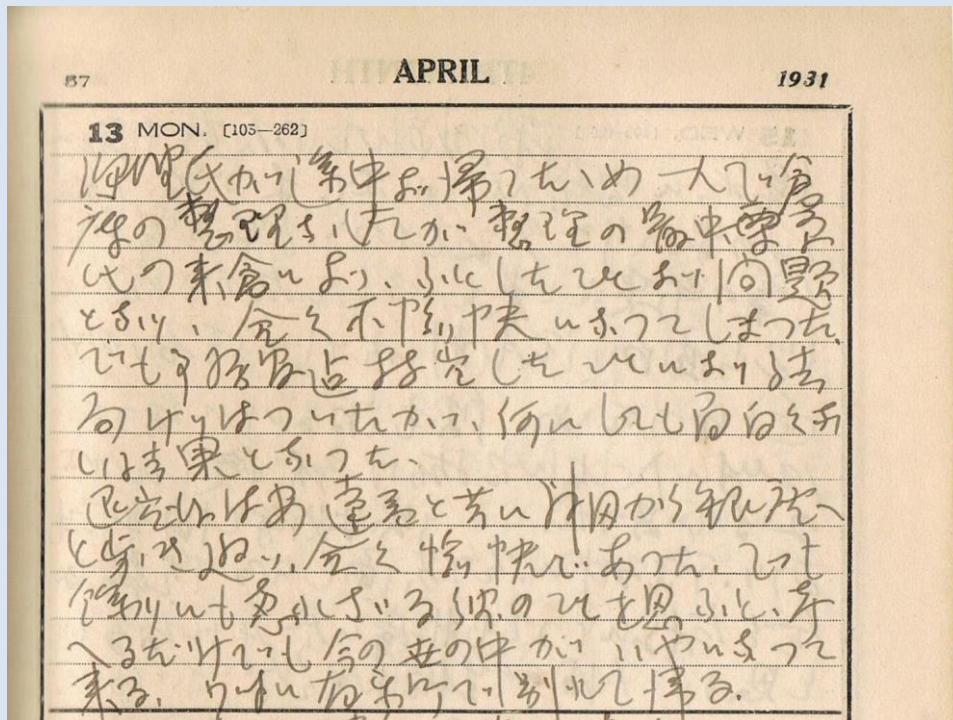
「H氏」と書かれた人物は、おそらく倉庫内での安田の作業手順や仕事ぶりを快く思わなかつたのだろう。このような同僚との衝突は、日記中に時折見られる。特に、「H氏」との相性は相当に悪かつたらしく、下記のように綴っている。

3月13日(金)

今日は案外気分もよく仕事も出来たけれども相変わらずH氏の事務上の態度には不満だけである。功利的に打算的にのみに走らんとする彼の行為は全く不満の外ない

4月13日(月)

澤野氏が途中より帰つたため一人で倉庫の整理をなしたが、整理の最中栗原氏の来倉により、ふとしたことより問題となり、全く不愉快になつてしまった。でも事務官迄持出したことにより結局けりはついたが、何にしても面白くない結果となつた



安田新井の日記
昭和6(1931)年
4月13日

また、別の衝突の様子も記されている。ここに出てきた「澤野」は、同僚の澤野周一で、約7ヵ月後の11月に病気で亡くなるが、安田とは特に親しい間柄であつたらしく、月給を毎回自宅へ届けていた。安田の義理堅い一面が窺える。

昭和6年における安田は、「雇」という臨時職員であり、日記には内職探しや生活資金の工面など、生活への不安が多く見られる。「雇」と「属」とは給与、待遇、仕事内容の懸隔が大きく、「官吏」として国家行政に携わることができたのは、「属」以上の判任官(正規の職員)であつた。図書課での仕事の内容としては、出版物の検閲に関する業務よりも、「予算の算定」(10月3日)、「政務官の仕事」(12月23日)、「議会資料作成」(12月28日)といった、雑用が多く見られる。昭和6年の安田は、図書課の主たる要員ではなく、あくまで雑用をこなす下支えとしての存在であつた。

<宿直について>

4年後の昭和10年には、6年の業務にはなかつた「宿直」業務をしばしば行なっている。

昭和10年1月14日(月)

起案一切を片をつけておく。3時より宿直室へ。宗氏と共にやつて非常に気も楽であつた。就寝は1時半。地方長官の大異動でこゝ相当に興味がある問題が自分等の課内にも起りそうだ。まア成り行きで、吾々には特別の反響もないであろう。安んじて時を待つのが第一だ。たゞ停滞せる空気の一掃を希ふ

1月15日(火)

6時半起床。8時半宿直事務を了す。10時50分帰宅

午後から宿直室へ二人体制で入り、翌日の午前中に帰宅する、という流れである。宿直における仕事は、主に新聞の朝刊を検閲することであった。「宗氏」とあるのは、宗玉生という安田の仕事上の先輩である。この当時、安田は先輩や上司の補佐として宿直を務めていたようだ。

4月には、美濃部達吉の著書『逐条憲法精義』『憲法撮要』『日本憲法の基本主義』の3冊。4月9日に禁止処分が下された)に関する書類を書いている。

4月17日(水)

美濃部博士著書に関する取締要綱の写しのため、6時半までかいつて書き上げ、8時半に帰宅なす

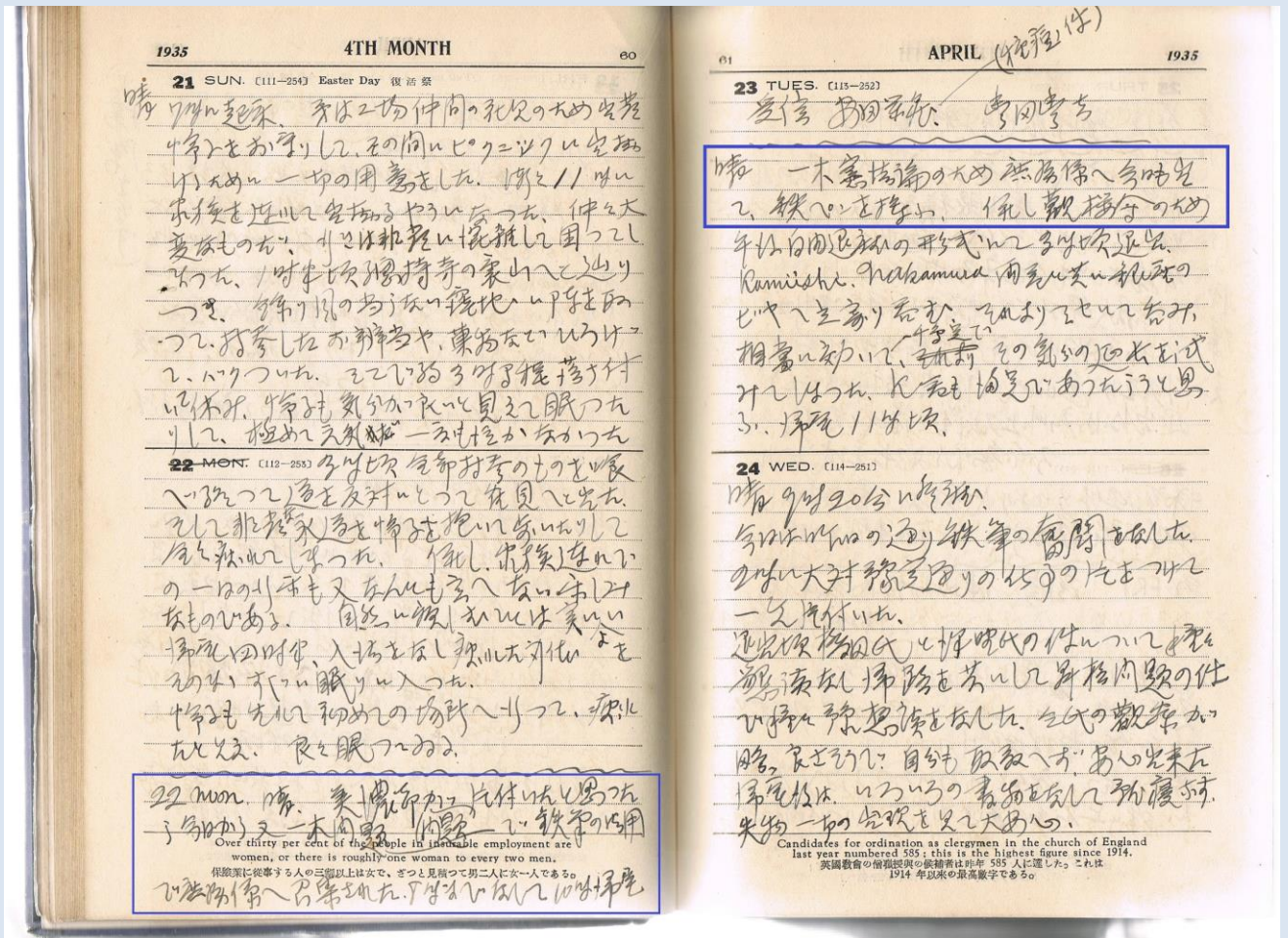
4月22日(月)

美濃部問題が片付いたと思つたら、今日から又一木問題で鉄筆の御用で庶務係へ召集された。8時まででなして10時帰宅

4月23日(火)

一木憲法論のため庶務係へ今日も出て、鉄ペンを揮ふ

「鉄ペン」とは、ガリ版を切る「鉄筆」を指す。安田は必要書類の清書を任されていたようだが、当時の枢密院議長であった一木喜徳郎を辞任に追い込んだ、《天皇機関説》問題への事務上の関わりが、ここから見えてくる。



安田新井の日記
昭和10(1935)年4月21日から4月24日

<「雇」から「属」へ>

昭和 10 年 6 月 13 日(木)

宿直事務の過失から、大石氏の注意を受けた。大した問題ではないが、全く実際に彼も純サーベルタイプと言ふか、併し昇格問題も控へてゐるので、心配して呉れる事は有難いことだ。そのため自分も非常に嬉しかった。居残り後、宿直に於て髭を剃つてから 7 時に退出

「大石」とあるのは、彼の上司にあたる大石芳である。安田は自身の過失に対する大石からの注意に、感謝の意を表している。安田の感謝には、理由があつた。この年に安田は、「雇」から「属」へ昇進をするが、内務省での人事異動が図書課内で様々に噂され、安田自身も強い関心を持っていたことが記されている。

6 月 3 日(月)

今回の異動その他については、彼(上司の国吉)は仲々口を緘して語らない。併し今度の異動は相当、期待外れではないだろうか

※下線部は著者補足

6 月 29 日(土)

日高氏と共に食堂にて種々と昇格問題の詮索をなした。一般の下馬評で行くと、まア大抵合格率は良いであろう

このように、昇進に対して安田は、期待と諦めの両方の想いに揺れ動いていた。そういった中で、自分に対して心配をしてくれた大石の行動を、安田はありがたく思ったのだろう。

判任官の採用については、一般的に試験によって行われるというイメージがあるが、普通試験のほか、中学校卒業、あるいは雇員の経験年数によつても採用される場合があつた。安田は昭和 3 年から 7 年間の雇員生活を送っていたが、彼が勤めていた当時の条件は、4 年以上である。昇進を長く待ちわびていたのだろう。

結果的には安田の「属」官昇進(判任官としての採用)が決まり、8 月 12 日(月)に辞令を受け取っている。

昭和 10 年 8 月 13 日(火)

公務依然として多忙。今日より本官として、執務をせねばならぬ。それは態度の上にも、執務の上にも、十分に注意をしてなすべきである

仕事の内容も、それ以前とは様変わりした様子が記されている。例えば、宿直業務が一人で行うものとなり、熱心に宿直業務へ取り組む一方、見逃せない記述も見られる。

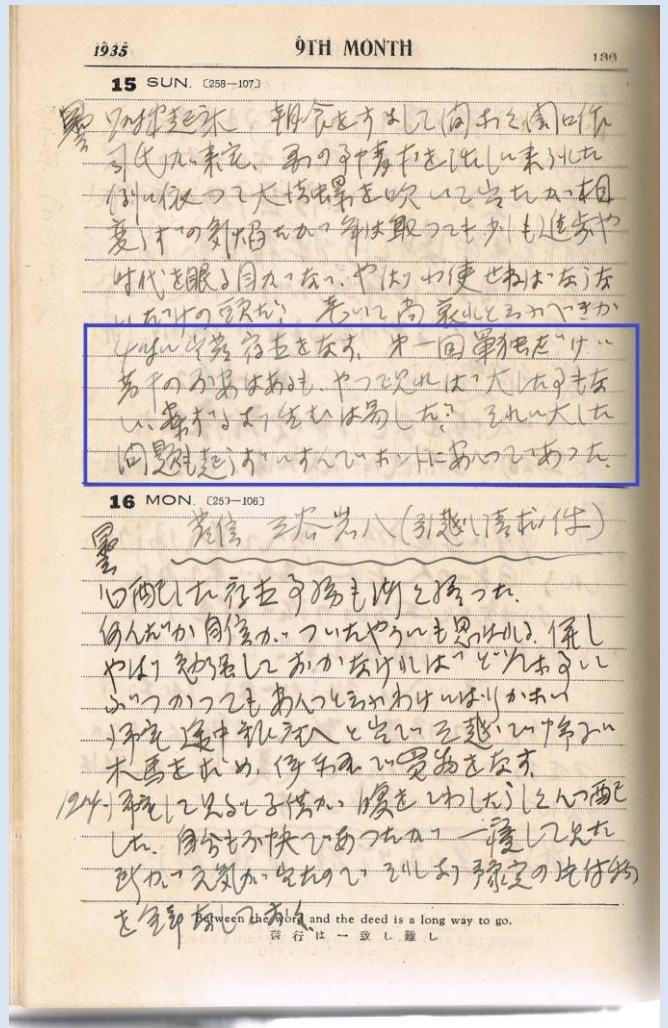
9月15日(日)

4時に出発、宿直をなす。第一回単
だけに、若干の不安はあるも、やつて
見れば大した事もない。案ずるより生む
は易しだ。それに大した問題も起らずに
すんで、ホントに安心であつた

10月2日(水)

7時半に起床したため、朝刊を充分に
検閲をする事が出来なかつた。殊に
大日本新聞を提出の筈であつたが、
遂に時間の切迫したため取止めた

安田新井の日記
昭和10(1935)年9月15日



<本格的な検閲事務を任される>

本レポートのはじめに紹介した「出版警察報」第89号の「検閲掛事務分担表」で示された業務分
担は、昭和11年からのものである。安田は新聞・雑誌の「風俗」関係の担当になっているが、それ
に関する記述が見られる。

昭和11年1月22日(水)

8時半まで寝込んだために、大急ぎで仕度なして出発なして、10時5分に登省なす。
昼休みに角力予想投票による抛金を以て、歓談しながら昼食を共にした。午後は風俗の
禁止要項を書いて見る。存外簡単なものだ。成せば成るもので、決して案ずることはない。
6時半退庁

相撲で賭け事をしていることはともかくとして、ここでの「風俗の禁止要項を書」というのは、「出版
警察報」、あるいは内部文書などに掲載する記事の部分執筆をした、ということであろう。安田が
禁止要項を書いたのはこれが初めてのようであり、ここから本格的に検閲業務の一端を任されたの
である。

実際に「風俗」の担当が正式に決まった 2 月 12 日(水)には、次のように記されている。

2 月 12 日(水)

午後 2 時に事務官より新聞検閲係風俗検閲主査の命があつた。そして後任には時澤君が来た。従つて若干の異動があつたわけだが、自分としては明らかに進歩である。実に愉快的事だ。愈一人旅が出来るやうになつた事については、大石さんへ余程感謝をせねばならない。実際に希望に係つてやつて行けた寸法だ。大いに努力しやう。そして十分に努力を發揮して見やう

自分の担当区分を持つようになったことを「一人旅」と表現しているのが面白い。また、これまでの下積みによって余裕をもって仕事に臨んでいる様子や、責任ある役割を安田がかねてから希望していた様子も読みとられる。

2 月 13 日(木)

朝の中に机を風俗の方へ変更して、先づ初の検閲官振りを示す。幸ひに検閲係に育つてゐるだけ、大した不安もない

2 月 19 日(水)

風俗の検閲も漸く馴れて来たし、同時に又興味も湧いて、相当に面白味があると云ふもの。人間は第一責任ある仕事を与へられないと、何んとなん機械そのものだが、一面機械な事である事に依つて、気は楽でもある

<二・二六事件>

2 月 26 日(水)

起床 7 時半、又雪だ。(中略)役所前まで行くと、軍人の羅列。何かと訊ねて見れば、大不詳事件があつたらしい。所謂厳戒令らしいのだ。某大臣の即死、考へて見れば頻々たる血醒い問題が次から次へと生れて来る。実に困つた事だ。昭和維新への前奏曲とも云ふか。12 時にそのまゝ帰宅なした。何んとなん気分の優れぬまゝで午後は終り、4 時頃から書物などして、その他整理を一切なす。雪は益々降つてゐる。こんな晩は早寝をしやう

これは、青年将校らがクーデターを起こした、いわゆる《2・26 事件》の当日である。

2 月 27 日(木)

9 時に登庁。不詳事件の話で何処も彼処も持切つてゐる。落ち付いて少しも仕事は出来ない。3 時頃になつて再び立退かねばならない事になつてしまつた。そして図書課の事務を一時芝愛宕所まで移し、そこでとる事にした。従つて第三班まで分けて、今日は第一班の人達が残る事となつたので、そのまゝ待機の形で、自宅へ引込んでゐなければならない。帰宅 5 時。夜は種々と事件の成行きについて種々と語り合ひ、夕食後は早寝をなす

内務省での業務に支障が出たため、現在の東京都港区、NHK の前身である「東京放送局」があつた場所へ事務機能に移し、納本を受け付けていたようだ。事件後には報道の規制も行われ、混乱の中での検閲事務の様子が記されている。内務省への引き上げは、3 月 1 日(日)に行われた。

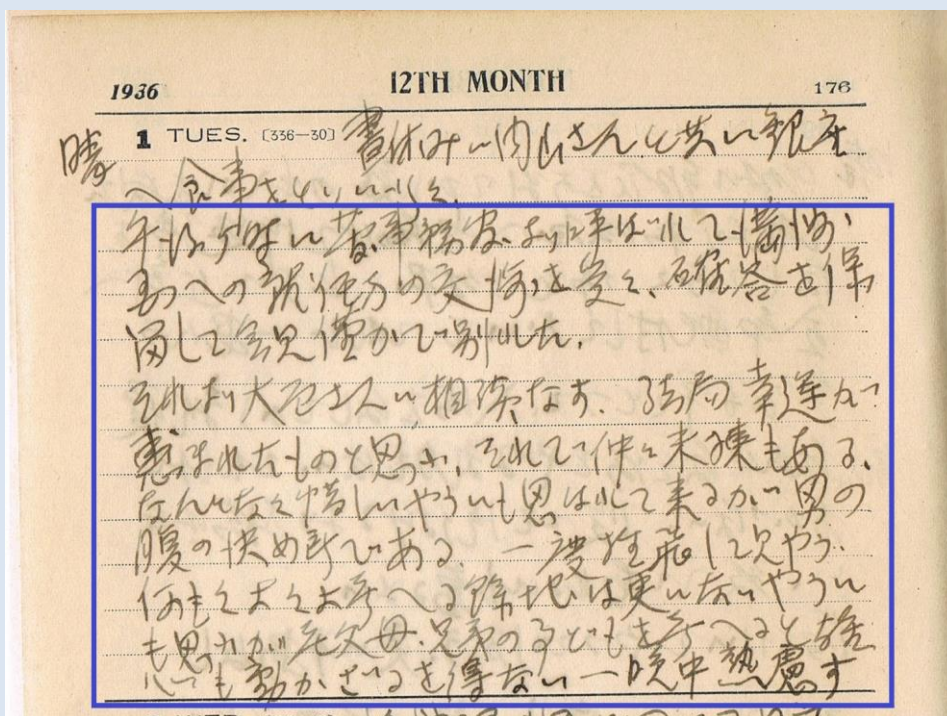
4. その後の足跡

その後、安田は長く検閲官として務めたのかと言え、そうではなかった。昭和11年12月には、次のように記されている。

昭和11年12月1日(火)

午後5時に昔事務官より呼ばれて、満洲国への就任方の交渉を受く。確答を保留して会見僅かで別れた。それより大石さんに相談なす。結局幸運が恵まれたものと思ふ。それで仲々未練もある。なんとなく惜しいやうにも思はれて来るが、男の腹の決め所である。一度雄飛して見やう。何もくよくよ考へる余地は更にないやうにも思ふが、老父母、兄弟の事どもを考へると■(一字不明、親か?)心も動かざるを得ない。一晚中熟慮す。

※下線部は著者補足



安田新井の日記
昭和11(1936)年
12月1日

突然、満洲への転勤が打診された。翌日、安田は友人らに相談して、最終的には3日(木)に満洲行きを決意した。

12月3日(木)

午後5時頃、警務官室に於て昔事務官と面会。赴任の決意をなしておく。これ断然たる男の涙である。胸中不安なし。極めて明朗。8時より石倉氏と板橋に於て感激の涙で酒を汲む。その友がなしてくれる美しき心情、涙あるのみ

5日(土)には郷里の親族へ報告に行き、と述懐している。満洲に派遣されることは、当時の栄転であった。

12月5日(土)

恐らく俺は偉くなれる。それが宿命かも知れない。検閲で赤線を引くのが俺の終生の仕事ではないのだ

